

則當以瓦草充之、瓦草其狀見石韋條、

〔饅頭屋本節用集草木〕垣衣シ、ナ 苾同

〔圓珠庵雜記〕玄のぶ草に三つあり、ひとつには垣衣つねの如し、ふたつには忘草を又はしのぶ草といふよし、大和物がたりに見えたり、これに付きて先達多くあやまりて垣衣をわすれ草とこころ得られたるもあり、又垣衣の外にわすれ草といふ物の軒におふるよしによめるもあり、わすれぐさおふる野べとは見るらめどと、業平のよめる物をいかで軒の草とはいふべき、又伊勢物語の心は一草二名とは聞えず、業平のしのぶとはいひつゝ、忘れたるを、女うらみてこれをわすれ草ともやいふとて、しのぶ草を出だして思ふ心をふたつの草の名にそへたり、下の心はしのぶをばわすれ草とは申さぬものをといへるなり、三つには萬葉に菅をもしのぶ草とよめり、しのび草とよめるは、かたらひ草のたぐひなり、重之集に、ことのはにいひ置く露もなかりけり、しのび草にはねをのみぞなく、元輔集に、行く先のしのび草にもなるやとて露のかたみにおかんとぞ思ふ、

(頭書)

眞淵云、伊勢物語にいへるは、わざと名をかへいひて、男のいはんにつけて、うらみんとまうけたる事、此人のいふがごとし、大和物語の頃にしも、誤る人ありつらん、玄のぶ草は、枕の草子に、くちたる物のはしなどに生ふるがをかきよしいへれば、軒に生ふる菅の類にて、さる物のあるなり、わすれ草は、萬葉にも萱草と書き、かの忘憂草の意によみたり、且枕冊子に、六月わすれ草の花の咲きたるよしありて、萱草にうたがひなし、又萬葉に菅をしのぶ草とよめるといふは、しのぶ草ははへてましをとよめるをいふなり、然れども、それ物語種の意をかたらひ草といふがごとく、したはる、思ひ草をはらへ捨てましをといふにて、菅をいふにはあらず、續古今戀五、わする、もしのぶも同じ古郷ののきばの草の名にこそありけれ、眞淵云、こは理